



Title	ネットワークにおける負の関系の機能
Author(s)	渡邊, 太
Citation	年報人間科学. 2002, 23-2, p. 193-211
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/11083
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ネットワークにおける負の関係の機能

〈要旨〉

本稿の課題は、社会的ネットワークにおける負の関係の機能について検討することである。社会的ネットワークには、信頼と愛情の関係だけではなく、不信や憎悪、猜疑といった負の関係も含まれている。ラドクリフ・ブラウンの構造機能主義人類学とゲシュタルト心理学・ソシオメトリの流れに位置づけられる一般的なネットワーク分析は、負の問題を見過ごしがちである。

これに対して、負の関係の重要性を指摘した社会学者として、G・ジンメルやN・エリアスの名前をあげることができる。彼らは、負の関係が人々を結びつける働きをすることを強調している。ジンメルやエリアスの理論的視座を継承して、社会理論の定式化を目指すソシオン理論は、負の関係を組み込んだネットワーク・モデルの構築を試みている。

ソシオン理論の三項関係モデルは、F・ハイダーのバランス理論を発展させたものである。正の関係三個か負の結合二個で安定するトライアドの安定ループは、静態的な均衡に落ち着くのではなく、時間のなかでしだ

渡邊 太

いに正負の結合が強化される自己増幅メカニズムを備えている。また、ソシオンのモデルは、リアリティのオブジェクト・レベル(身体的行為)、サブジェクト・レベル(認知・感情)、メタ・レベル(思考)を区別する。ソシオン・ネットワークは、階層交叉構造をもつ。リアリティの階層という概念を導入することで、ネットワーク・ダイナミクスについて精密に議論することが可能になる。

キーワード

ネットワーク、負の関係、バランス理論、三項関係、ソシオン

1 はじめに

T・M・ニューカムの negative reference group は、訳書では「消極的準拠集団」と訳されている (Newcomb, 1950=1956)。¹⁾ 中には、大きな問題が含まれている。negative reference group は、positive reference group と対概念になつてゐる。positive と negative には、日本語の積極的、消極的という意味もあるが、ニューカムの negative reference group の概念は、消極的に作用する準拠集団を指しているのではなく、積極的に否定すべき対象としての集団を指しているのである。そうすると、negative reference group は、むしろ「否定的準拠集団」という訳語のほうがふさわしいように思える。ニューカムの定義はつぎのとおりである (以下の引用文は、訳書の「積極的」「消極的」を「肯定的」「否定的」に修正したものである)。

肯定的準拠集団は、人が (外面的にせよ、象徴的にせよ) 進んでその成員として受け入れられ、取り扱われたいという動機をもつ集団であり、それに対して、否定的準拠集団とは、人がこれに反対しようとする動機をもつ集団であり、あるいはその一人員として取り扱われることを好まない集団である。(Newcomb, 1950=1956, 225)

たとえば、非行グループに出入りする少年少女にとっては、家族がネガティブな準拠集団になる。家族は不信や反発、憎悪の対象となり、反動として非行グループへのコミットメントが促進される。

ニューカムがいたかったのは、ネガティブなもの積極的な作用である。negative を「消極的」と訳してしまうと、ネガティブなもの積極的な力を見逃してしまうことになる。¹⁾ 消極的準拠集団という訳語が生まれる背景には、社会関係におけるネガティブなものの作用を過小評価する見方があるのではないだろうか。

本稿では、ネットワーク分析の文脈で負の関係の問題を検討する。相互依存的な関係の網の目として社会をとらえるネットワーク分析において、敵対や闘争、不信、猜疑といった負の社会関係について理論的に考察することは重要である。現実の社会が信頼や愛情だけから成り立っているのではない以上、負の關係の機能を説明することは、理論上必要な手続きである。以下では、負の關係の理論的重要性を指摘した G・ジンメル、N・エリアス、F・ハイダーらの議論を整理し、正負の紐帯からなるネットワーク・モデルの構築を試みる。ネットワーク分析の射程の拡大と精密化が本稿の課題である。

2 負の關係の結合作用

不信や敵対、憎悪など、一般的にネガティブな含みをもつ感情が社会関係において積極的に作用することを指摘した点で、ニューカムの否定的準拠集団の概念は重要である。これを消極的準拠集団と

訳すと、概念の意義がひどく損なわれてしまう。社会学では、しばしば負の関係が消極的なものに置き換えられてきた。L・A・コーザーは、闘争をシステム不適應の問題に置き換えることの問題点を指摘している。不適應問題としてとらえると、闘争の積極的な機能が見過ごされてしまうのである (Cosser, 1956 = 1978, 22-28)。

負の関係を軽視する傾向は、ネットワーク分析にもみられる。ネットワーク分析とは、相互作用するユニットをつなぐ関係の連鎖を理論のベースとする分析方法である。他のアプローチとの違いは、属性や理念ではなく関係を理論の根本的な構成要素とみなす点にある。ネットワーク分析の特徴として、S・ワッセルマンとK・ファウストは、つぎの四点をあげている。

- ① 行為者およびその行為は、独立した自律的ユニットというよりも相互に依存したものとしてとらえられる。
- ② 行為者間の関係の紐帯(結合)は、(物質的ないし非物質的) リソースを伝達・移送するチャンネルである。
- ③ 諸個人に焦点を合わせたネットワーク・モデルは、ネットワークの構造的環境を、個人の行為に機会を提供するか、もしくは、制限を加えるものとしてとらえる。
- ④ ネットワーク・モデルは、構造(社会的、経済的、政治的その他)を行為者間の永続するパターンとして概念化する。

(Wasserman and Faust, 1994, 4)

相互依存的関係の連鎖をベースとして、行為や構造を概念化するのがネットワーク分析の特徴であるとすれば、正の関係だけでなく、負の関係も対象となるはずである。しかしながら実際には、不信や敵対、憎悪、猜疑、恨み、妬みといった負の関係は、あまり議論の俎上に載せられることがない。たとえば社会階層論では、ネットワークを利用可能な資源としてとらえる視角がある (Granovetter, 1973)。また、パーソナルネットワーク研究では、多くの場合、親しい友人のネットワークが対象とされる (森岡編 2000)。職業的地位達成や夫婦役割関係に対してネットワークが及ぼす効果を検証することがネットワーク分析の重要なテーマである。これらの研究では、基本的に信頼や友愛のネットワークが対象となる。

J・スコットは、ネットワーク分析の理論的出自として、ゲシュタルト心理学・ソシオメトリの流れとラドクリフブラウンの構造機能主義人類学という二つの系譜をあげている (Scott, 2000, 8)。ソシオメトリーは、実験室での観察やケース・スタディにより集団構造と情報の流れに焦点を合わせて、グループ・ダイナミクスに関する知見を蓄積している。ラドクリフブラウンの構造機能主義は、社会システムにおけるインフォーマル・グループや対人関係の重要性を指摘した。この二つが今日のネットワーク分析の発想の源流になるという。

これに対して、負の関係を重視するネットワーク的社会観もある。社会を相互依存的な関係の網の目として構想したジンメルやエリアスは、不信や敵対など負の関係について重要な洞察を残している。

ここにA・シュッツを加えて、ネットワーク分析のもうひとつの系譜をたどることができる。

シュッツは、相互同調関係を基盤とする「われわれ関係」から出発して、直接的には現前していないが潜在的に關係しうる存在である「同時代人」との關係、そして、時間的に先行／後続する「先行者」「後継者」との關係の連鎖として社会的世界をとらえた(Schutz, 1964=1991)。私の知らない友人Xについて語る友人Aの話から、私は目の前にあらわれない不在の他者Xの存在を想像する。シュッツの社会学論では、このように、直接的に接觸しない人間の存在を關係の連鎖として想像することが、社会的世界を構成する営みになる。シュッツの議論は、後述する多元的リアリティの階層交叉的ネットワーク・モデルを示唆する点で重要である。

エリアスは、他者との關係に開かれた諸個人の相互行為の過程として社会をとらえる。構造機能主義的 sociology は、社会的集合体について、あたかも岩石や樹木や家屋と同一ような対象・客体が問題であるかのように記述する。エリアスによると、こうした物象化的思考操作は、相互依存的ネットワークとして社会を理解することを妨げる。物象化的思考ではなく、諸個人からなる社会の關係構造的な特色を正確に理解する枠組みが必要である。エリアスはつぎのように述べている。

個々の人間は、他の多くの人間を結合している鎖の一部分である。他の人間の各々も（間接的であれ直接的であれ）彼らを結

合している鎖の一部分である。この鎖は、鉄の鎖のように、見たり捉えたりすることができない。この鎖は、鉄の鎖よりも弾力性に豊み、変形しやすい。しかし、この鎖は、鉄の鎖に劣らず現実的で、固定的でもある。人間が互いにもっている機能のこの連鎖は、わたしたちが「社会」と呼ぶものにはかならない。(Elias, 1987=2000, 26)

社会は、他者との關係に開かれた諸個人の連鎖として構成される。エリアスの提唱する社会学的認識枠組みは、社会を相互依存的なネットワークとしてとらえるものである。社会のなかの個人は、他者との關係に開かれた感情的結合子を備えた存在であり、いくつかの結合子は他者に繋ぎ留められているが、その他は自由に他者との結合に開かれている。ここで強調しておくべきことは、相互依存的なネットワークの結び目となる人間像の問題である。エリアスは、「魂の管理室」のような内面をもつ閉じられた存在としての個人というイメージに反対する。人間は感情的結合子により他者とながら、相互依存的なネットワークを形成しながら、その關係のなかでたえず変化していく存在である (Elias, 1987=2000, 35)。人間と社会をこのように認識すると、パターン化された關係を固定した客体とみるのではなく、人々の絶え間ない相互行為の営みの過程としてとらえる視点が得られる。

關係を動態的にとらえる思考の知的源流は、ジンメル形式社会学に求められる。ジンメルによると、社会を可能にするものは相互

作用であり、社会学の課題はその相互作用の形式の探求である。ジンメルは、国家や階級、家族、経済制度のように相互作用の諸力が観念的な統一体となっているような現象のみから社会が成り立っているのではないという。それらの隙間にすべり込むかたちで、人々の間には無数の微細な関係形式と相互作用がある。この微視的・分子的な過程がつなぎ合わされて、社会の統一体と体系が可能になる。

人びとのあいだの社会化は、たえずたがいに結びあい、たがいに離れてはまた新たに結びあいつづけ、永遠の流動と脈拍が、たえず固有の組織にまでは高まらないばあいでさえ諸個人を連結する。(Simmel, 1908=1994a, 29)

生成変化する人々のあいだの相互作用が、社会の形成の根幹をなす。そして、エリアスと同様にジンメルも、個人が孤立した存在ではないことを強調する。個人は社会関係の結節点であり、すでに社会的なものとして存在する (Simmel, 1908=1994a, 52)。相互依存的なネットワークは、他者との関係に開かれた諸個人の連鎖として構成される。ネットワークの結び目としての個人は、関係のなかでたえず変化する。このように、エリアスやジンメルらのネットワーク的社会観では、ネットワークの動態的なとらえ方が重要である。この点で、ラドクリフ・ブラウンの構造機能主義人類学の系譜に連なる静態的なネットワーク的社会観とは対照的である。

さらに、エリアスやジンメルのネットワーク的社会観でもうひと

つ大切なのは、負の関係の結合作用である。相互依存関係は、必ずしも信頼関係であるとは限らない。エリアスは、敵対しあつて互いに殺戮しあう二つの部族の例をあげている。二つの部族は、互いに相手の戦闘能力、狡猾さ、食糧備蓄などにもとづいて自分たちの方針を決定する。「かくしてここで問題となるのは、各個人の全人格を賭けた一手ごとのネットワーク形成のモデルである」(Elias, 1970=1994, 86-87)。一方の部族の行為の連鎖は、他方の部族と関係づけることではじめて理解できる。エリアスは、「この場合、双方の行為の機能的な相互依存は、規制された協働の場合にまさるとも劣らない」(Elias, 1970=1994, 87) という。殺し合いのような相互依存関係も、ネットワーク形成の過程になる。

また、社会化の形式としての闘争というジンメルの命題にも、闘争そのものが社会的結合として作用するという含みがある。闘争はもつとも生々しい相互作用のひとつであり、社会化の積極的な契機を示している (Simmel, 1908=1994a, 262)。ジンメルは、単に連帯のみからなる社会よりも、連帯と闘争の両方を含む社会の方がより強い生命力をもつという。

宇宙がひとつの形式をもつためには「愛情と憎悪」、牽引力と反発力を必要とするように、社会もまた一定の形式に達するためには、調和と不調和、結合と競争、好悪と悪意のなにほどの量的な割合を必要とする。しかしこれらの分裂はけつしてたんなる社会的な負債、否定的な事例ではなく、ために決定的な

現実の社会は、たんに積極的な別の社会諸力によつてのみ、しかも分裂に妨げられないかぎりにおいてのみ成り立つのではない。この通俗的な見解はまったく皮相的である。社会はそれが存在しているように、相互作用の二つのカテゴリーの結果であり、そのかぎり両者はまったく積極的にあらわれる。(Simmel, 1908 = 1994a, 263-264)

ジッメルは、負の関係のもつ積極的な作用を明確にとらえていた。闘争こそ、積極的に諸個人を結びつける結合作用として機能する。これが負の関係の積極的な力である。

3 三項関係モデル

ハイダーのバランス理論は、今日のネットワーク分析の流れのなかでは、負の関係への視角を含む点できわめて稀少かつ貴重な議論である (Heider, 1958 = 1978)。ハイダーは関係構造の形式的な感情論理 (affective logic) を定式化し、正の関係三個か、負の関係二個を含むトライアドが安定した均衡状態 (balance) になることを指摘した (図1)。バランス状態では変化に向かう圧力が存在しないと考えられる。正の関係二個か負の関係三個のトライアドは不均衡 (imbalance) で、均衡状態へと推移する等終局性 (equifinality) を有する。

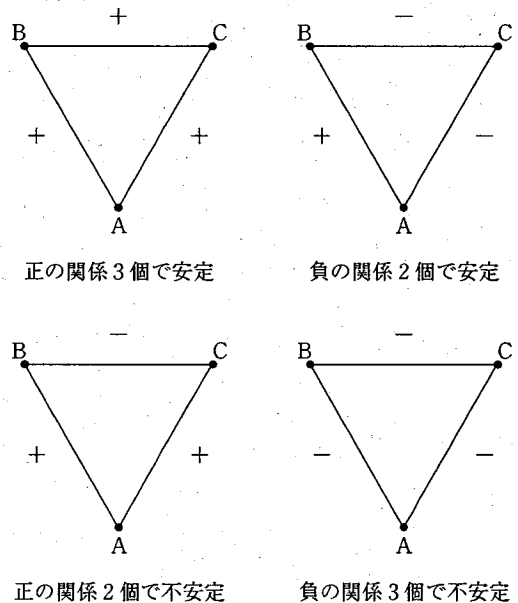


図1 トライアドのバランスとインバランス

D・カートライトとF・ハラリーは、三者以上の複雑な関係において、「符号グラフの各点が相互に排他的な二つの部分集合に分けられる場合、つまり同一部分集合内の二点はそれぞれ正の線分で結ばれ、部分集合を異にする二点はそれぞれ負の線分で結ばれる場合に、かつその場合に限り、その符号グラフは均衡状態にある」(Cartwright and Harary, 1956 = 1970, 860) という構造定理を導いた。つまり、どれだけ複雑なネットワーク構造であっても、バランス状態であれば全体は二つのサブグループに分かれるということである。サブグループ内のノード(ネットワーク上の点)は正の関係によって結ばれ、サブグループ間のノードは負の関係によって結ばれる。

ワッセルマンとファウストは、「構造的バランスのもつとも重要な面は、均衡グラフにおけるノードは、二つのサブセットないしくラスタに分割されうるということである」(Wasserman and Faust, 1994, 233)と述べている。構造分析としてのネットワーク分析では、全体の均衡におけるクラスター化といった点が重要になる。

しかし、ここではジンメルやエリアスの理論的系譜にハイダーを位置づけることで、バランス理論のべつの面に光をあててみよう。この視座は、負の関係の機能とネットワークの動態的側面に焦点を合わせる。バランスの視点は重要だが、全体の均衡という部分を強調しすぎると、負の関係の結合作用がみえなくなる。

ソシオン理論の三項関係モデル(トリオンのモデル)は、ジンメルやエリアスの理論的視座からハイダーのバランス理論を再定式化したものである。ソシオン理論は、木村洋二・雨宮俊彦・藤澤等の共同研究から生まれたもので、相互依存的関係をベースに社会と個人を説明するネットワークコミュニケーション理論の構築を試みている(木村 1999; 藤澤 1997; 雨宮 2001)。ソシオン(socion || socio-neuron)とは、ネットワークの結節点としての個人や集団など社会的行為主体を指す概念である。ソシオンとしてのヒトは、想像的同一化・象徴的同一化によって自己のうちに他者の一部を、他者のうちに自己の一部をもつ複合主体として構成される。

ソシオン・ネットワークは、リアリテイのオブジェクト・レベル(身体的行為)、サブジェクト・レベル(認知・感情)、メタ・レベル(思考)の三階層間のくり込み変換・くり出し変換によって自他をた

たみ込みながら、階層交叉コミュニケーションによって多元多層的に結ばれる。ふつう人間の主観的現実とか主観的意味世界と呼ばれるものは、サブジェクト・レベルのリアリテイにあたる³⁾。

ソシオンは、他者の可能な行為についての予期を形成する。予期のポテンシャル量を荷重(semio-weight)と呼ぶ。木村の定義によると、「荷重は正負のデキゴトにたいする期待値を含む一種の情報量であり、強さとプラス・マイナスの分極性をもつ」(木村 2001, 22)。信不信、好き嫌い、愛情憎悪など正負の分極性をもつ荷重の備給量が、サブジェクト・レベルにたみ込まれた表象のリアリテイ強度を規定すると仮定する。リアリテイは、価値中立的な平板なものとして体験されるのではなく、強烈な快や強烈な不快のように強い体験から、相対的にどうでもよいと感じられるような弱い体験まで、強度の幅をもつ。荷重備給による予期の形成によって、サブジェクト・レベルのリアリテイが重みづけられる⁴⁾。

人間の意識は、基本的にサブジェクト・レベルを生きている。サブジェクト・レベルにくり込まれた他者の像に備給される荷重の量が、ソシオン・ネットワークの結合強度になる。荷重概念のポイントは、リアリテイの体験強度とネットワークの連結強度を理論的に接合するところにある。これによって、憎悪や不信といった負の関係もネットワークの結合作用としてとらえることができる。

リアリテイ強度 \parallel 結合強度としての正負の荷重という概念のルーツは、フロイトのいう生の欲動(Libenstrieb)と死の欲動(Todestrieb)にある(Freud, 1923 = 1970)。生の欲動を代表する愛

情と死の欲動を代表する憎悪は、いずれも無関心と対立する。欲動の備給から生み出される愛情と憎悪は、ともに主体を対象に結びつける力として働くのである。

荷重の布置は、他者とのコミュニケーションによって変動する。外部から入力された荷重情報は、表象リアリテイの荷重変換装置を経由して一定の自由度のもとで、サブジェクト・レベルの荷重備給を決定する。二項関係の荷重変換装置をダイオン (dyon)、三項関係の荷重変換装置をトリオン (trion) と呼ぶ。ダイオンの荷重変換論理は、差異化と平等化の運動を幾何学的にとらえる「欲望のキューブ・モデル」によってあらわされる (木村 2000)。トリオンの荷重変換論理は、バランス理論の感情論理にもとづくネットワーク動作として記述できる (木村 2001)。

ソシオンの三項関係モデルは、図2のようなイメージになる。中央の三つの円がオブジェクト・レベルのトライアッド (オブソション) をあらわし、吹きだし内部の小さな三つの円が各々のサブジェクト・レベルにくり込まれたトライアッド (サブソション) をあらわす。サブジェクト・レベルにくり込まれたトライアッドが、三項関係の荷重変換装置 (トリオン) である。木村は、つぎのように説明する。

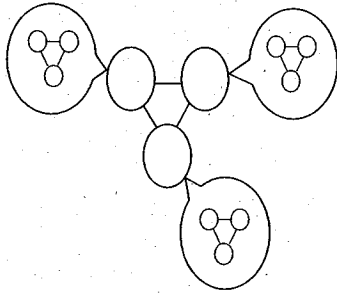


図2 ソシオンの3項関係モデル

トリオンとは、三項関係のダイナミックな関係を、表象と荷重の三項関係にたたみ込んだ関係の記憶装置であり、この記憶を予期として他者との接合面に投射する一種のプロジェクターであるといっている。それは、関係のなかで他者の出方を予期し、接合にも先駆けて自己の対応を起動するための認知・感情的な回路構成体であり、無意識のレベルも含んで他者を把握し他者に対応するための基幹ソフトである。(木村 2001, 27-28)

ハイダーのバランス理論は、ネットワークにおける負の関係に着目した点できわめて重要であるが、ネットワークのオブジェクト・レベルとサブジェクト・レベルの区別がややあいまいである。オブジェクト・レベルの三項関係について、三者がそれぞれ異なる関係モデルを思い描いている状況は現実によくある。

A・ハストーフとH・キャントリルの古典的研究は、リアリテイの解釈依存的性格を明快に示している。彼らは、プリンストン大学とダートマス大学の試合で、一方の応援団はクリーンで公平な試合と評価し、他方の応援団はダーティーな荒れた試合だと憤っていたケースを分析した (Hastorf and Cantrell, 1954)。オブジェクト・レベルでは同じひとつの試合であっても、観衆のサブジェクト・レベルでは違ったふう生きられる。したがって、ネットワーク動作を精密に議論する際には、リアリテイの階層を区別する必要がある。

トリオンは、正の関係三個か負の関係二個のとき安定する。正の

関係二個か負の関係三個の不安定パターンは、安定パターンに移行する傾向がある。この点はハイダーのバランス理論と同じである。ただし、安定状態のとりえ方が異なる。ソシオン理論でいう安定は、等終局性としての均衡ではなく、コミュニケーションによる荷重のループ生成によって関係が相互増幅的に強化していく動態的な過程を意味する。安定トリオンでは正負の結合力を強化するポジティブ・フィードバックが作動すると考えるのである。

この発想は、ジンメルの闘争論にもとづく。ジンメルの闘争論は、三項関係論として読むことができる。三項関係において、二項が連帯して一項を排除するとき、負の関係二個を含む安定状態になる。したがって、闘争が社会化の形式として機能するもつとも単純なパターンは、負の関係二個を含む三項関係である (Simmel, 1908 II 194a, 279)。一方への連帯と他方への闘争は、相互に強化しあう。このような連帯と闘争の複合が社会の条件となる。社会的なものの契機について、E・レヴィナスが印象深い表現でこんなふう述べている。「社会は愛をはみ出している。愛の対話のかたわらには、傷つけられた第三者の姿がある」(Levinas, 1991 II 193, 32)。愛の関係は、かたわらの負の関係と絡みあうことで、社会の生成の契機となる。この意味で、三項関係は社会の原基的モデルと考えられる。

闘争と連帯によって安定した三項関係では、一方への連帯が他方への闘争を強化するかたちで全体が動態的に安定するのである。この安定ループは、静態的な均衡状態ではなくて、むしろ時間のなかで強化され結合子がロックする。

正の関係三個か負の関係二個の安定トリオンは、三項関係のどの辺が正負の関係であるかによってPPP、NNP、PNN、NPNの四種類に分けられる (PはPositiveで正の関係、NはNegativeで負の関係をあらわす)。三項関係の一項の視野に立つと、荷重動作の入力(受動)と出力(能動)に応じて四種類のパターンが区別できる(能動能動、能動受動、受動能動、受動受動)。これに、循環型・反射型・誘導型という三つの動作類型(対辺の荷重入力向きを区別すると六通りになる)の区別をかけあわせると、合計九六パターンのトリオン動作が分類できる(木村 2001)。トリオンのダイナミックスは、潜在的に可能な九六種類のパターンから、特定のトリオン動作が選択的に起動される過程として記述できる。

すべての関係パターンは可能態として潜在するが、実現された相互行為では特定の関係セットの動作パターンが選択的に起動される。荷重の正負、入力順序、能動受動の選択をとおして、潜在的なトリオン動作を維持しつつ、荷重動作をくり出すことが可能になる。この点で、ソシオン理論のネットワーク・モデルは、観察されるパターンの総和としてネットワーク構造を記述するモデルや、可能なパターンの総和として関係変化の方向性を導出するモデルとは異なる(3)。起動されるトリオン動作によって、異なる物語が生きられる。可能態から現実態が選択的に起動されるプロセスが、ネットワーク・ダイナミックスの核心である。

4 ロミオとジュリエット

安田雪はネットワーク分析の基本的な考え方を紹介するテキストの冒頭で、こんな小話をあげている。

たとえばここに一組の若い恋人たちがいます。名前はロミオとジュリエットでも、ミッキーとミニーでも、お軽と勘平でも何でもかまいません。この恋人たちは互いに愛し合っているのですが、残念なことに、また実際よくありがちなことに、双方の恋人の両親をはじめ家族・友人がすべてこの恋愛に反対しています。理由は、反目しあう家柄だからでも、恋愛は営業に支障をきたすからでも、身分違いだからでも何でもかまいません。この二人は「別れる、止める、捨てろ」と周囲から、連日連夜大反対をされています。まわりからの干渉を受けたこの二人の恋は……。(安田 1997, ii-iii)

さて、二人の恋はどうなってしまうのか。安田は二種類の回答パターンを示している。(A) 周囲の反対にあつて、ますます燃え上がる(ロミオとジュリエット!)、(B) 周囲の反対にさらされているうちに互いに醒めてしまう。安田は、「(A) を選んだあなたは、ロマン主義の詩人や小説家タイプ。ネットワーク分析とはおよそ正反對の基準、いわば感性で物事を判断する方です。(B) を選ばれたあ

なた、あなたの非ロマンティックで現実的なクールな判断こそが、ネットワーク分析的な思考の基礎です」(安田 1997, iii) という。

だが、ほんとうにそうだろうか。反対されればされるほど恋が燃えあがるという(A)の回答が、ネットワーク分析とは正反對の考え方であると思うのは、信頼と友愛のネットワークだけを想定しているからではないだろうか。

負の関係の結合作用に注目すると、周囲から反対されるからこそ恋の炎がめらめらと燃えあがるということが現実的にも理論的にもありうることを説明できる。図3は、周囲が反対すればするほど二人の正の関係が強化されるネットワーク動作をあらわす。図3の吹きだしは、ロミオとジュリエットそれぞれのサブジェクト・レベルのリアリティをあらわしている。ロミオの吹きだしでは、ロミオとジュリエットが正の関係(○||P)で相互連結している。反対者はジュリエットに一方的に負の荷重(●||N)を振り込んでいる。二つの関係が固定されたとき、その反対者にロミオは負の荷重(●||N)を振り込む。負の関係二個を含む安定トリオンでは、反対者が恋人のことを悪くいえばいうほど、二人の正の関係は強化されていく。反対者への不信とジュリエットへの愛情が、ロミオのサブジェクト・レベルで増幅されるのである。

ジュリエットの吹きだしも、同じことをあらわしている。こうして、二人のサブジェクト・レベルのリアリティが一致するかぎり、周囲の反対が強ければ強いほど、恋の炎は燃えあがる。恋人たちにとっては、負の関係にある周囲からの反対は、二人の結合を高める

ように作用する。ソシオン理論では、このようなネットワーク動作を、「ネットワーク反対効果」と呼んでいる。

もちろん、すべての恋がハッピーエンドになるわけではないだろう。二人の恋の物語が哀しい結末を迎えることもある。これをネットワークの効果として説明するとき、単に周囲からの反対の影響によって恋の炎が鎮火すると考えるのは、いささか大雑把すぎる。オブジェクト・レベルとサブジェクト・レベルを区別することによ

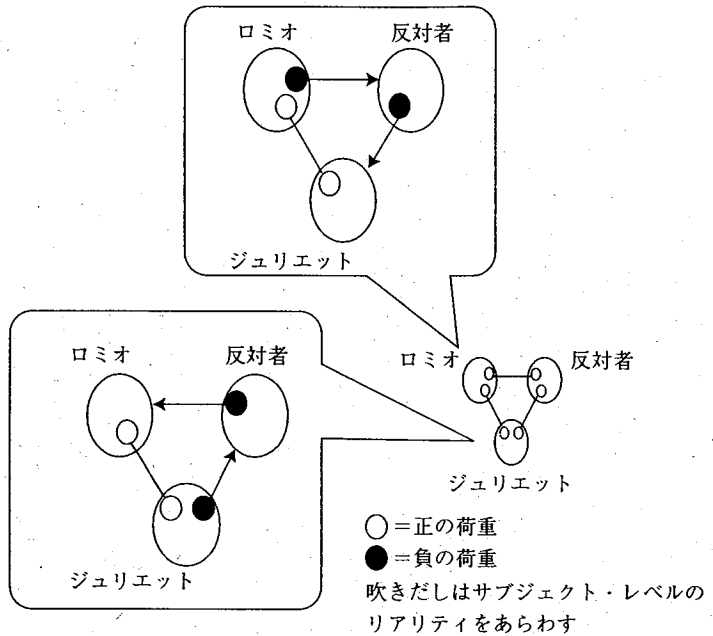


図3 ロミオとジュリエット

て、もうすこし精密に議論をすすめることができる。

実際よくありそうなのは、二人の吹きだし内部に構成されるトリオンが微妙にずれていくケースである。ジュリエットは、家族に反対されて弱気になったロミオの様子をみて、私への愛が足りないのではないかと疑うかもしれない。この最初の微かな不信は、ロミオの行動をみているうちににだいに増幅される可能性がある。不信は負の予期を形成し、現実の解釈として強化されるからである。

ロミオへの疑いが増大すると、「あんな奴とは別れるべきだ!」という家族や友人の言葉がだんだん正しい意見に聞こえてくる。この状態は、三項関係としてみると、ロミオに対してジュリエットと家族が負を振り込む、負の関係二個の安定ループである。ジュリエットのサブジェクト・レベルでこの安定トリオンが成立すると、家族・友人への信頼とロミオへの不信が相互増幅的に強化されて、恋は醒めてしまうだろう。

ジュリエットの荷重動作に連動して、ロミオのサブジェクト・レベルのトライアドも揺らぎはじめる。ジュリエットからの不信のままざしにさらされたロミオは、自分を信じてくれないジュリエットに失望するかもしれない。二人の仲が気まずくなってくるのと並行して、それまでは聞き流していたジュリエットを誹謗中傷する家族や友人たちの言葉が、やけに信憑性をもって聞こえてくる。こうして、ロミオのサブジェクト・レベルで、ジュリエットを排除してロミオと反対者が連帯する安定ループが成立する。

最初の小さな不信がきっかけとなって、二人のサブジェクト・レ

ベルに裂け目ができる。それぞれのサブジェクト・レベルで独自のトリオン回路が作動することで、最終的に恋が終わってしまうこともあるだろう。思いのすれ違い、恋人との気もちギャップといった表現で私たちが日常的に感じる状況は、吹きだだし内部に構成されるトリオンのパターンのズレとして理解できる。互いにサブジェクト・レベルのズレに気づかないままコミュニケーションがもつれて展開するとき、関係は運命的破綻に向かって進んでいく。

不信についてのN・ルーマンの議論は、この猜疑と誤解のメカニズムを理解する上で示唆に富む(Luhmann, 1973 II 1990)。不信は、しばしば行動のなかで表出される。不信を向けられた者は、不信の原因を自分の行動ではなく不信を抱いた相手に帰属させる。結果として、不信の相互関係が成立する。ルーマンは、不信が「予言の自己成就」のメカニズムの核心であることを指摘する。

不信は、マートンが古典的な論文のなかで「予言の自己成就」という名称を与えたあの過程の好例であり、それどころか恐らくあの過程の核心をなしている。この過程の基礎をなしているのは、いわば逆のフィードバック原理である。誤って調整した、あるいは危ういやり方で調整したシステムは、自己と環境との均衡をはかるが、その際、自己を結果に基づいて修正するのではない。そうではなくて結果において自己が確認されていることを見いだし、さらにそこから新しい原因の結果をつくりだすのである。(Luhmann, 1973 II 1990, 138)

ロミオとジュリエットのケースでいうと、「二人は別れる」とか「あの人は君のことなんて愛していないよ」という誰かの予言が、リアリティの階層間のくり込み・くり出し変換をとまなう三項関係の運動のなかで実現されていくとき、愛情は不信に転化する。最初のきっかけがどこにあるかを確定することは現実的にはきわめて困難である。人はそれぞれのサブジェクト・レベルのリアリティを生きている。真相は数のなかである。木村は、「他者との関係が相互に回りだして、はじめは思いつきのようなものに過ぎなかつた初期状態の『妄想』がオブジェクトレベルで実体化し、その運動を社会的に自己実現していくことになる」(木村 2001, 58)と述べている。予言は、三項関係のネットワーク・ダイナミックスのなかで社会的に実現されるのである。

R・K・マートンのあげる自己成就的予言の例も、三項関係のネットワーク・ダイナミックスとして記述できる(Merton, 1949 II 1961, 382-386)。人種差別のケースとして、マートンはこんな例をあげている。黒人労働者はスト破りをする、と信じる白人労働者たちは、黒人労働者を組合から排除することで、結果的に黒人労働者のスト破りを促進してしまう。白人労働者にとっては、低賃金でも仕事にありつこうとする黒人労働者は経営者側に取り込まれているようにみえる。白人労働者のトリオンでは、経営者と黒人労働者が手を結び、労働組合に敵対するという三項関係の安定ループが成立している。このトリオンにもとづいて、黒人労働者を組合から排除するのである。黒人労働者の立場からすると、経営者とはじめから手

を結んでいるつもりはない。しかし、黒人労働者のサブジェクト・レベルで、白人労働者と経営者の敵対関係を初期条件として、白人労働者から排除されると、可能なネットワーク動作として経営者との連帯が生まれる。こうして、負の関係一個の安定ループが成立し、予言が実現されることになる。

銀行倒産のケースでは、銀行に支払い不能の噂が立つと、人々は預金を引き出そうとする。人々が預金を引き出すのを知った他の人たちも、預金を引き出そうとする。ここでは、銀行に対する不信を共有することで連帯する私と他の預金者という三項関係が成立している。負の関係二個で安定したこのトリオン・ループでは、銀行がたとえ安全宣言したとしても、銀行に対する人々の不信は拭えないだろう。むしろ、かえって不信感をつのらせるかもしれない。こうして、支払不能という予言が実現されてしまう。

銀行倒産のケースでネットワーク動作として注目すべき点は、S・ジジエクが指摘するように、実際には誰ひとり支払い不能という予言を信じていなくても、予言は実現されてしまうことである(Zizak, 1989=2000, 281-282)。すべての預金者のサブジェクト・レベルにおいて、他の預金者たちが銀行の支払い能力に不信を抱いているという予期が発生するならば、たとえ自分自身は噂が根拠のないデマだと知っていても、やはり預金を引き出しにいくだろう。噂を信じている他の預金者たちがいつせいに預金を引き出すと、結果的に銀行は支払い不能に陥ってしまうからである。実際には誰ひとり噂を信じていないとしても、各々のサブジェクト・レベルに他者

性の予期として「信じているはずの主体」が構成されるならば、この予期にもとづいてくり出される行為によって、やはり予言は実現されてしまうのである。

ニューカム否定的準拠集団の概念も、集団を関係に置き換えて考えるとネットワーク動作として記述できる。否定的準拠集団の概念は、シンプルなかたちで定式化すると負の関係一個を含む三項関係のパターンとして記述できる(図4)。

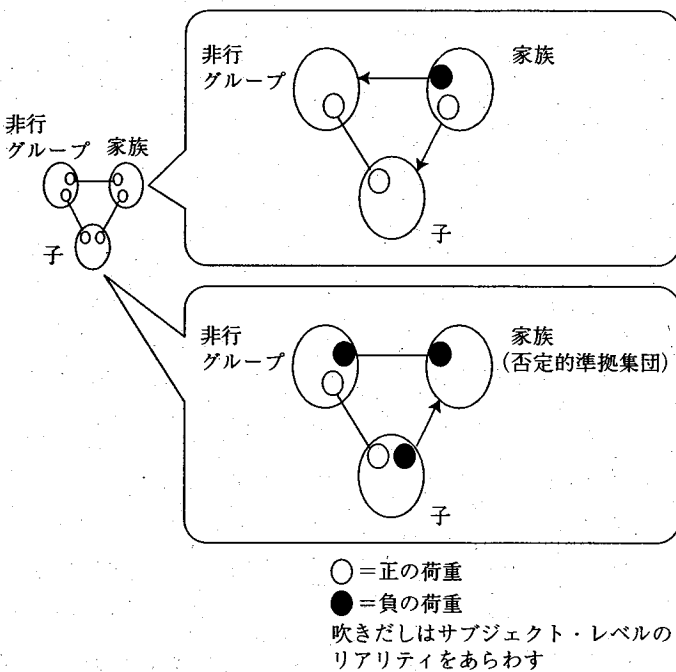


図4 否定的準拠集団

図4は、非行グループと子どもと家族の三項関係をあらわす。吹きだしは、子どもと家族のサブジェクト・レベルに構成されるトリオンを示している。子どものトリオンは、非行グループを肯定的準拠集団とし、家族を否定的準拠集団とする三項関係である。家族のトリオンは、愛する子どもが非行グループに入ることに戸惑って正の關係二個の不安定状態である。この条件で、子どもと家族がそれぞれのトリオン配列にしたがって相互行為すると、つぎのような過程が進展すると考えられる。すなわち、家族が非行グループに子どもを近づけないようにしようとすればするほど、子どもの家族への反発と非行グループへのコミットメントは強化されていく。¹⁰ ニューカムがつぎのように述べている部分は、ネットワーク動作として読み解くことができる。

とくに強烈な態度の多くは、このようにして、二重に強化されるようである。それらは肯定的と否定的の双方の準拠集団をよりどころとしている。たとえば、「典型的な」アメリカの青少年は、自分の両親への反抗と自分の年齢集団の仲間と同じようになりたいという願望の両方に自分の「反抗的」態度のよりどころを求めている。あるローマ・カトリック教徒は、その反共産主義的態度のよりどころを自分の境界への忠誠と、共産主義団体への反対のうちに求めている。(Newcomb, 1950=1956, 226)

その集団がポジティヴかネガティヴかは、準拠する個人によって

異なる。子どもにとってポジティヴな意味をもつ非行グループが、家族にとつてはネガティヴな評価の対象となる。集団という言葉を使うとみえにくくなるが、肯定的準拠集団と否定的準拠集団は、ばらばらに存在しているのではなく互いに関係づけられている。關係の網の目のなかにあるからこそ、家族が子どもを非行グループから抜けさせようとすればするほど、かえって子どもが家族から離れていく可能性(ネットワーク反対効果)が生まれる。青少年にとつて、両親と年齢集団の仲間は負の關係によって結合している。これを初期条件とすると、安定パターンに向かう三項關係の推移傾向により、一方と正の關係を結ぶことが、他方との負の關係形成を帰結する。行為者と肯定的準拠集団、否定的準拠集団は、三項關係のネットワーク動作に組み込まれているのである。

5 おわりに

現実に生起する社会現象のなかには、負の關係がネットワーク・ダイナミックスを駆動する否定性の政治学というべき事態が多くみられる。¹¹ 排除や暴力など負の動作の予測・制御は、ネットワークに埋め込まれた人間にとつて最重要課題である。この予測・制御は、たいてい理性的にはなく、無意識の荷重動作として遂行される。それゆえ、負の荷重がネットワークをかけめぐって關係の結び目が締まっていく危険はつねにある。

不在の第三者をめぐる予期の形成においても、正負の荷重誘導は

否定性の政治学として作動する。この場合、負の関係が負の社会関係資本として利用されることもあるだろう。「あいつは信頼できない」というネガティブな評判は、「あいつは信用できる」というポジティブな評判の欠如を意味するのではない。負の評判は、積極的な負の効果をもつのである。

ネットワーク分析で負の関係が軽視されがちな理由のひとつとして、検証の困難さがあるかもしれない。ネットワークに関するデータの多くは、関係の有無を問うもので、関係の正負については記録されていない (Wasserman and Faust, 1994, 242)。負の関係のデータは、正の関係のデータに比べて収集が難しい。負の関係を生きる人はそれを隠すし、みたくない人は目をそむける。裏切り、密告、恨み、陰謀は、強く生きられていながら、語られることがない。被害者は語ることができないし、加害者は語ろうとしない¹²。さらに、抑圧や解離によつて無意識の闇に閉じ込められている可能性もある。もつとも、検証の困難さは、負の関係の考察を回避すべき理由にはならない。検証の難しい問題だからこそ、理論的に精密な議論を積み重ねる必要がある。

負の關係に人間が拘束されることは、精神分析や精神病理学の文献に多くの記述がみられる。たとえば、R・D・レインはこんなふうにいう。

彼らは、自分たちを怖がらせるものに救いを求めてしがみつ

熱い鉄板に手を触れて、その手を引っ込めないで逆にもっと強

く鉄板に押しつけるひとのようなものである。あるいはまた、動きはじめたバスに乗りかけて、一番手近の、だが、一番危険な対象物であるバスにへ本能的にすがりつくひとのようなものである。〈賢明な〉やり方は、手を離して乗車をあきらめることであるのだが——。(Lang, 1961=1975, 184)

サブジェクト・レベルのリアリティにおいては、負の関係は自分を結合させる働きをする。激しく嫌悪する対象や侮蔑する相手、あるいは畏怖すべき他者の印象ほど強く刻みつけられるものである。人は負の関係の結び目にとらえられる。対面的な相互行為の場面を超えて、ネットワーク全体が負の関係によつて浸潤されるとき、虐殺や肅清といった人類の悲劇が生まれる。この悲劇を狂気や邪悪さのせいにするのではなく、関係のなかで生きる存在としての人間の可能なネットワーク動作のひとつの帰結として考察する必要がある。

注

(1) ここでは、システムにおけるネガティブなものの肯定的な作用(順機能)というようなことをいつているのではない。結果的にどのような機能を果たすのであれ、ネガティブなものが積極的に作用(function)することを強調したのである。

(2) スコットもソシオメトリーにおけるジンメルの影響は認めているが、ネットワーク分析の学説史上の位置づけとしては間接的なものととどまっている。また、コーザーの指摘によると、K・レヴ

インの弟子たちのグループ・ダイナミックス研究では、闘争を社会化の形式とみるジンメルの視点ははたしいにかえりみられなくなつたようである (Coser, 1956=1978, 18-19)。

(3) くり込み変換・くり出し変換は、P・L・バーガーのいう内在化・外在化、あるいは、R・D・レインのいう振り入れ・投影とほぼ対応する (Berger, 1967=1979; Lang, 1971=1979)。しかし、内部と外部という二階層の区別を前提とするこれらの用語は、三階層間の変換動作を記述するのに適さない。

(4) 限られた情報処理能力によって時間間のなかで先の予測をしなから行動していくためには、環境から入力される膨大な情報のなかから主体にとって重要なものを選択する必要がある。情動的な正負の価値付与による予期の形成 (荷重の備給) は、この認知と記憶の過程に作用する。報酬性と嫌悪性の判断が、情報選択を促進するのである (小野・西条 2001, 87)。

(5) 欲動と本能はまったくべつの概念である。フロイトの「*Trieb*」を「本能」と訳すと誤解を招く。J・ラカンは、フロイトの著作の英語版が、「*Trieb*」を *instinct* と訳してしまっているために、ひどく不都合な事態に陥っていると指摘する。ラカンによると、「*Trieb*」とは「みなさんがたの尻を後ろから突つくものであって、いわゆる本能とは何の関係もないのです」(Lacan, 1973=2000, 65)。

(6) コミュニケーションにおいて交換されるのは、メッセージの意味内容だけではない。メッセージのリアリティを支える荷重は、雰囲気や影響力のようなものとして、しばしばメタ・メッセージのチャンネルを通じて伝達される。木村洋二と増田のぞみは、F・ソシュール、M・バフチン、G・ペイトソン、J・クリステイヴァらの言語記号論との関連で荷重概念について整理している (木村・増田 2001, 210-213)。

(7) 図2には、オブジェクト・レベルとサブジェクト・レベルしか示していないが、他者のサブジェクト・レベルへの洞察によって可能となるメタ・レベルもある。メタ・レベルは、吹きだし内部のトライアドそれぞれに、もうひとつ吹きだしをつけるかたちで表現できる。単なる有向グラフでは、サブジェクト・レベルとオブジェクト・レベルの区別は図示できない。三項関係における自己と他者の関係は矢印によって表現できるが、他者と他者との関係についての予期は、階層モデルでないと表現しにくい。

(8) たとえば、三項関係のネットワーク・ダイナミックスを扱ったモデルとして、J・E・ハンターの動態的ソシオメトリーがある (Hunter, 1978)。ハンターのモデルでは、メンバーシップの固定された小集団において個々人は他の成員に好悪の感情をもつが、その関係は、集団内の第三者との関係によって時間経過とともに変化すると仮定される。成員 i の j に対する好悪の変化量は、 k に対する i と j の態度および k の i と j への態度すべての好悪の量から推測される。

(9) ネットワーク反対効果の他の例として、親が反対すればするほど子はカルトへの信仰にのめり込むといった状況や、教師が頭ごなしに叱りつけることでかえってイジメが深刻化するという状況が考えられる (木村・渡邊 2001; 木村・松尾・渡邊 2001)。

(10) 構築主義的な問題関心は、サブジェクト・レベルに構成される関係モデルの項として何が選択されるか (何が選択から排除されるか) という点にかかわる。項の選択は、トリオン動作の可能態と現実態の接続に先行する。もちろんこの選択も独立してなされるのではなく、他者とのコミュニケーションの場に帰属している。

(11) 詐欺やベテン、誤解、すれ違いといったことを執拗に記述する E・ゴフマンの「フレーム分析」は、否定性の政治学を生き生き

と描いている (Goffman, 1974)。とくにコフマンは、サブジェクト・レベルとオブジェクト・レベルのリアルティのギャップやズレを利用しておこなわれる負の荷重動作に注目している。フマプリケーションやフレーム・トラップは、秩序化によって回避されるべきリスクではなくて、オブジェクト・レベルの秩序化を前提に行為がくり出されることに内在するリスクといえる。

(12) しかし、語ることの不可能性と可能性のつながりを断ち切るべきではない。アウシユビッツの体験について、G・アガンベンはいくつもの証人は証言しようにも証言できなかった者であるという証言の不可能性を問題化している。人間と非人間の同一性は完全ではなく、証人とは人間的なものの破壊の後に残るなにかのことである (Agamben, 1998 = 2001, 182)。アガンベンは、「証人の権威は、語ることができないならどうするかの名におおつての語ることであり、つまりは主体であることである」(Agamben, 1998 = 2001, 213) と述べている。

参考文献

Agamben, Giorgio, 1998, *Quel che di Auschwitz: L'archivio e il testimone (Homo Sacer III)*, Bollati Boringhieri. (= 2001, 上村雄男・廣石正和訳『アウシユビッツの残りのもの——アルミーサと証人』月曜社)

雨宮俊彦 2001, 『相互作用で解く心と社会』関西大学出版部。

Berger, Peter L., 1967, *The Sacred Canopy: Elements of a Sociological Theory of Religion*, Doubleday. (= 1979, 蘭田稔訳『聖なる天蓋』新曜社)

Cartwright, D. and F. Harary, 1956, "Structural balance: A Generalization of Heider's Theory", *Psychological Review*, 63, 277-

293. (= 1970, 黒川正流訳『構造的均衡——ハイダー理論の拡張』三陽二不二・佐々木薫訳編『グループ・ダイナミックス』誠信書房 845-871.)

Coser, Lewis A., 1956, *The Functions of Social Conflict*, Routledge. (= 1978, 新陸人訳『社会的闘争の機能』新曜社)

Elias, Norbert, 1970, *Was ist Soziologie?*, Juventa. (= 1994, 徳安彰訳『社会学とは何か』法政大学出版社)

——, 1991, *Die Gesellschaft der Individuen*, Auflage. (= 2000, 宇宮卓典訳『諸個人の社会』法政大学出版社)

藤澤等 1997, 『フシオン理論のコト』北大路書房。

Freud, Sigmund, 1923, *Das Ich und das Es*. (= 1970, 小此木啓吾訳『自我とエゴ』フロンティア著作集の自我論・不安本能論』人文書院 263-299.)

Goffman, Erving, 1974, *Frame Analysis: An Essays on the Organization of Experience*, reprinted 1986, Northeastern University Press.

Granovetter, Mark S., 1973, "The Strength of Weak Ties", *American Journal of Sociology*, 78, 1360-1380.

Hastorf, Albert H. and Hadley Cantril, 1954, "They Saw a Game: a Case Study", *The Journal of Abnormal and Social Psychology*, 46, 129-134.

Heider, Fritz, 1958, *The Psychology of Interpersonal Relations*, Wiley. (= 1978, 大橋正夫訳『対人関係の心理学』誠信書院)

Hunter, John E., 1978, "Dynamic Sociometry", *Mathematical Sociology*, 6, 87-138.

木村洋一 1999, 『フシオンの一般理論 (I)』『関西大学社会学部紀要』30(3), 65-126.

—— 2000, 『フシオンの一般理論 (II)』『関西大学社会学部紀要』31(2,3), 63-149.

—— 2001, 『フシオンの一般理論 (III)』『関西大学社会学部紀要』32(2), 1-

104.

木村洋一・増田のぞみ 2001, 「マンガにおける荷重表現——ページの『めぐり効果』とマンガの『文法』をめぐって」『関西大学社会学部紀要』 32(2), 205-251.

木村洋一・松尾繁樹・渡邊太 2001, 「インジメのモードとネットワークの力学——排除のシンシオン理論をめぐって」『関西大学社会学部紀要』 32(2), 177-204.

木村洋一・渡邊太 2001, 「親・子・カルトのトライアッド——信者と家族と教団のシンシオン・ネットワーク分析」『関西大学社会学部紀要』 32(2), 105-175.

Lacan, Jacques, 1973, *Le Séminaire, Livre XI: Les quatre concepts fondamentaux de la psychanalyse*, Seuil. (= 2000, 小出浩一・新田一成・鈴木國文・小川豊昭訳『精神分析の四基本概念』岩波書店)

Laing, R.D., 1961, *Self and Others*, Tavistock. (= 1975, 杉貴春彦・笠原薫訳『自己と他者』みすず書房)

——, 1971, *The Politics of the Family and Other Essays*, Tavistock. (= 1979, 阪本良男・笠原薫訳『家族の政治学』みすず書房)

Lewinas, Emmanuel, 1991, *Entre nous*, Grasset. (= 1993, 合田正人・谷口博訳『われわれのもぐたぐ』法政大学出版局)

Luhmann, Niklas, 1973, *Vertrauen: Ein Mechanismus der Reduktion sozialer Komplexität*, Ferdinand Enke. (= 1990, 大庭健・正村俊之訳『信頼』勁草書院)

Merton, Robert K., 1949, *Social Theory and Social Structure*, Free Press. (= 1961, 森東吉・森好夫・金沢美・中島竜太郎訳『社会学理論と社会構造』みすず書房)

森岡清志編 2000, 『都市社会のパーソナルネットワーク』東京大学出版会。
Newcomb, T.M., 1950, *Social Psychology*, Dryden Press. (= 1956, 森東

吾・萬成博訳『社会心理学』培風館)

小野武年・西条寿夫 2001, 「記憶と情動のメカニズム」『失語症研究』 21(2), 87-100.

Scott, John, 2000, *Social Network Analysis: A Handbook, second edition*, Sage.

Simmel, Georg, 1908, *Soziologie*, Duncker & Humblot. (= 1994a, b, 居安正訳『社会学(上・下)』白水社)

Schutz, Alfred, 1964, *Collected Papers, III: Studies in Social Theory*, Nijhoff. (= 1991, 渡部光・那須壽・西原和久訳『シュッツン著作集第3巻 社会学理論の研究』ベルジュ社)

Wasserman, Stanley and Katherine Faust, 1994, *Social Network Analysis: Methods and Applications*, Cambridge University Press.

安田書 1997, 『ネットワーク分析』新曜社。

Zizek, Slavoj, 1989, *The Sublime of Ideology*, Verso. (= 2000, 鈴木晶訳『イデオロギーの崇高な対象』河出書房新社)

The Function of Negative Relationship in Social Networks

WATANABE Futoshi

The aim of this paper is to examine the function of negative relationship in social networks. Social networks include not only trust and affection, but also negative elements such as distrust, hatred and suspicion. Most social network analyses have originated from Radcliffe-Brown's structural-functional anthropology and gestalt theory on cognitive psychology combined with the studies of sociometry. These structural analysis approaches are prone to overlook the function of negative relationship.

On the contrary, some sociologists such as Georg Simmel and Norbert Elias emphasized the function of negative relationship to connect individuals. Grounded on this theoretical framework, "socion theory" tries to construct a network model installing the idea of negative relationship.

The concept of socion denotes individuals, groups and organizations as social agents embedded in social communication networks. The triad model of socion, or "trion model" developed Fritz Heider's balance theory. According to trion model, it is assumed that the stabilized patterns of triad consist of three positive relations or two negative relations and one positive relation. The stabilized system of triad operates self-amplifying mechanisms strengthening the oriented relationship. Furthermore, socion model theoretically distinguish the level of realities. The object-level of reality involves material objects and physical actions. The subject-level of reality involves representations and feelings. The meta-level of reality involves language and thinking. Introducing the concept of stratification of reality, we could discuss the social network dynamics more exactly.

Key Words

network, negative relationship, balance theory, triad, socion